

農協がカタクリを山菜として 出荷することについて考える

西山邦夫

野生植物の山菜としての利用は、最も身近な利用形態であり、昔から多くの伝承によって受け継がれ、それを元に凶荒食、副食あるいはワラビ、ゼンマイ、ウドなどのように重要な産業と結びついたものがある。しかし近年、社会情勢の変遷に伴い、限りある自然界においては、かつての形のまま質量とも受け入れられないものが多い。

私は山菜について、キノコを始めワラビ、ゼンマイ、ウドなどのように産業と結びついた山菜を除いては、機会があれば個人的に川原や丘陵、山道などで、自然の仕組みをわきまえて、ささやかに摘み、その植物の成分によって加工を変え楽しむものと考えている。また、多くの「山菜」の手引書が出版されているが、それらは無差別に「食」を意図したものではなく、許容のあることを示唆している。

今般、私は野生植物の山菜としての利用には、その許容範囲を越えたと考えられる行為を見聞きしたので、そのあらましを順を追って記述し皆様方からご批判をいただきたいと思います。

〈カタクリのバック詰〉

1988年4月13日、家内が六日町のスーパーより山菜として販売されていたあざみ、あずきな、カタクリの3種類のバック詰を購入してきた(資料1)。値段はいずれも1バック ¥88、一であった。

あざみ、あずきは芽出し間もない地上部の茎と葉の部分であった。カタクリも地上部のみではあったが、いずれの個体も花芽を持ち、固く巻いた葉の下部にはみずみずしい白い地下茎が長くついていた。カタクリは1バック約50グラムで20~21本、1本の値段が約4円に換算される。

出荷元は、バックのラベルから松代町農協であることがわかった(資料2)。

早春の花カタクリは、雪国の春の使者として自然の中で視覚で愛でるものと思っていたが、それが、山菜として農協が関与し、出荷している事には強い衝撃を受けた。また、出荷量も莫大なものであろう事も想像にかたくなかった。

4月14日、朝日新聞社の記者に相談し、農協の出荷状況を調査することにした。

県経済連園芸養蚕課や長岡中央青果会社によると、上越地方を中心に9農協が自然のカタクリを含むものを5~6年前から出荷しているという。また松代町農協は10年前の1978年頃から東京の市場や新潟の市場に自然のものを毎年600~800キログラムも出荷していたことが判明した。

〈カタクリの分布と生活史〉

カタクリの分布は、北海道、本州、四国の深山から丘陵地であり、日本特産種である。

雪どけの頃、春の使者として咲きそい、約2か月のわずかな間に、太陽のエネルギーを使い、生活に必要な養分を合成し、本格的な春の訪れを待たずに姿を消す。1年の残りの約10か月は、深い地中で来年の生活の準備をする春の短い植物である。また、種子から開花に至るまでは、多年を要するといわれ、自然群落の実生苗で、最も短期間で開花に至る個体は7~8年もかかる。さらにカタクリは虫媒花で、昆虫が訪花し花粉を運んでくれないと種子ができない。種子は1個の子房に35個前後入っており、発芽率は70パーセントを超えてきわめて発芽がよい。カタクリ群落を注意深く観察すると、開花個体の中に松葉状の実生苗や大小さまざまの1枚葉を持ったカタクリをみることができるが、途中で枯れてしまう個体が多いという。そして残った少数の小苗が生長し、やがて葉が2枚になって開花に至る。

栽培もできるが、取り播きで、開花まで6年あるいはそれ以上かかり、ポイントは光と水で根気があるという。

このようにカタクリは、自然のものでも栽培によるものでも種子から開花まで多年を要し、栽培による利用は収益を上げるうえで困難な事がわかる。

バック詰のカタクリは、地下の鱗茎こそついていないが、生活上最も大切な同化組織を抜き取られたのであるから、以後、地下の鱗茎は生活を維持する上で大打撃を受けるのは明らかである。また、当然の事ながら花は、子孫にない手である種子を作る器官である。

長い時をかけ、地上部の一隅の自然に適応し、短期間地上生活をすごす早春の可憐なこの生物を大規模に採取し、それを継続すればどうなるか、生物の生産に携る農協にわからないはずはない。

〈カタクリは指定植物〉

指定植物とは、国立、国定公園の風致景観を構成する重要な要素であることから特別地域内においては環境庁によって保護されている植物をいう。指定要件は、鑑賞用、園芸用、薬草用等として採種され易く、規制を行わなければ絶滅する恐れのある植物である。

これまでの指定植物は、1957年10月の第1次指定、1965年7月の第2次追加指定により、71属、種に換算して1,200種が指定されていた。さらに、1977年から3か年計画で改定調査が行われ、国立、国定公園に係る指定植物は、北海道では1980年3月、残る国立、国定公園については1981年3月に改定の告示がなされた。

1981年環境庁が出版した「国立、国定公園内指定植物図鑑—東北編—」では、カタクリは環境庁の指定する植物として掲載されている。

指定理由は二項あり、A、景観構成に主要な種(特にきれいな花が群落として一斉に開花し、春、夏、秋の季観を構成す

る植物)、B、観賞用種及び園芸業者、薬種業者、マニア採取種(採取の対象となる商品的価値のきわめて高い植物)によって理由づけられている。

今般のカタクリ出荷元の農協の組合地域は、国立、国定公園から外れており、個人所有の土地ではあろうが、だからといってこのようなカタクリを自然破壊に通じる大量な山取りを行なってもよいという理由にはならない。人間も生物の一員であり、地球上の自然は等しく皆のもので、人類にはその自然環境を保全する義務がある。カタクリはなおのことこの地域の文化を育んだ貴重な植生として保護育成せねばならない地域の宝でもあるはずだ。カタクリは環境庁が指定植物として理由づけている貴重種である。それも観賞のため採取禁止であり、今般の当農協の行為は、さらにこの理由を上まわる大量出荷による「食ってしまう」という無知蒙昧な驚くべき行為であり、この蛮行は断じて許されるものではない。

自然保護の声の高い今日、農協は、山菜として利用できる植物の許容を見きわめる能力を常識として保持していなければならないのではないか。

〈マスコミが警鐘〉

4月16日、朝日新聞全国版の「声」の欄に茨城県の主婦の方が「カタクリの花は山野が似合う」という見出しで投稿された(資料3)。この中でカタクリの出荷元は深山山菜カタクリ=産地新潟とし、「私なら観賞だけで大満足、谷あいに咲いているのを切るのは惜しい。」と書いておられる。国民の大多数の方は同じ心情であろう。

4月20日、朝日新聞新潟版に「山菜ブーム カタクリにまで」という大見出しで、松代町の方の「毎年、この季節が待遠しいが、心なしか茎が細くなり、数も減ってきた感じ。なくなってほしくない」とコメントをつけて大きく報道された(資料4)。

〈カタクリ保護の現状〉

県内には顕著なカタクリの保全地域はないので最寄の関東地域に限って、主なカタクリの保護の現状をみると、賢明な地元民と行政が結びつき、徹底した保護対策に成功している例がかなりある。

東京都練馬区の通称清水山では「清水のカタクリを守る会」を結成し、区の行政策としては「清水山憩いの森」として保全地区にしている。ここで注目し得る事は、所有者が、カタクリの群生地を取り扱いを会と区に一任していることである。

栃木県星野のカタクリ群生地は、所有者、地元民で結成した「星野の自然を守る会」で、保護活動を行ない、1986年には県の緑地環境保全地域に指定された。

東京都清瀬市のカタクリ群生地は、特別保全地域、千葉県柏市の群生地は市天然記念物、埼玉県飯能市岩崎の群生地は市天然記念物にそれぞれ指定されている。また、東京都と埼玉県にまたがる狭山丘陵地のカタクリ群生地は、水道の水源地として全域立入禁止の行政管理下におかれている。

その他、行政とはまだ結びつかないまでも、地元の団体がカタクリを保護している例がある。

茨城県内原町では町民の奉仕活動、東京都「多摩丘陵の自然を守る会」、八王子市では「八王子自然友の会」、日野市では「日野の自然を守る会」、千葉県では千葉県生物学会が、それぞれカタクリを含む自然の保護に取り組んでいる。

このようにカタクリの群生地は、学術的、教育的多岐にわたる価値がよく認識され、理解ある土地所有者と賢明な地元の方、あるいは行政が関与し、カタクリ群生地が保護されているのが現状である。

このような事から今後、当農協を含め県内のカタクリの出荷業者は、山菜としての野生植物の許容範囲をよくわきまえ、何もかも換金するというのではなく、郷里の自然のすばらしさを認識し、自然の恵みを保護活用する中から将来を展望する方向を見定めなければならない。

4月22日、新潟日報の「声」の欄に新潟市の主婦の方が「一人ひとりが自然を大切に」と角田山のカタクリについて投稿されている(資料5)。

多くの県民、国民が、心から自然の保護には注視している事を山菜を取り扱う当事者は心に命ずべきであろう。

(長岡科学博物館 にしやま・くにお)



資料1. 左からあざみ、カタクリ、あずきなのバック詰。
(コップのものは、バックから取り出し水にさしたもの)

新潟松代 深山山菜

かたくり

自然がうれしい100%自然食品

- ◎ かるくゆがいて水に取り、すぐに水を切っておひたし、あえものとする。
- ◎ 生のまま、天ぷら、汁の実とする。

まつだい町農業協同組合
☎ 02559-7-2002
新潟県東頸城郡松代町
大字松代2098-4

資料2. 出荷元を明示したラベル。

山菜ブーム カタクリにまで

パック詰めで スーパーに並ぶ

パック詰めのカタクリ



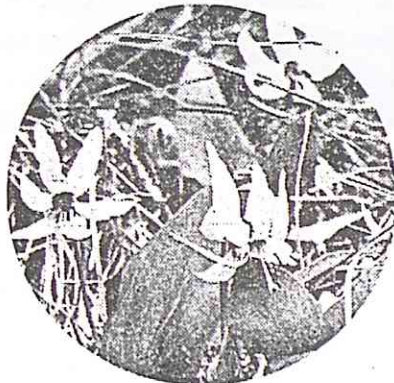
群生地消える恐れ

農協など 保護団体から批判

万葉にも歌われたかれんな花、カタクリがピンチにさらされている。山菜ブームに目を付けた県内の農協などが、山から摘み取ったカタクリをパック詰めにし、県内や東京方面のスーパーなどに出荷しているからだ。これを知った自然保護団体などは「山で見て楽しむ花、野放しにしては山野から姿を消す恐れもある」と批判、販売中止を訴えている。スーパーで新潟産カタクリが売られているのを見た新潟県内の主婦も、本紙掲載で行進隊を率いるチームに疑問を投げかけている。

カタクリは、ユリ科の多年草。九州を除く全国の山地や丘陵地に自生し、県内では四月から五月にかけて紅紫色の花を咲かせ、球根はカタクリ粉の原料で昔から食用とされていたが、いまはほとんど使われていない。

パック詰めされているのは、つぼみがついた花茎の部分。二十本ほど入った五十グラムパックで二百円前後。おひたしや天ぷら



紅紫色の花を咲かせるカタクリ
＝東頸・松代町蓮平で

このパック詰め販売で、カタクリの群生地がなくなるのを心配する声が多い。県環境保全審議会専門調査員で、長岡市立博物館館長補佐の西山邦夫さん(左)は「カタクリは茎を引き抜くと球根が死んでしまったりする。分布状況を調べる必要がありそうだ。国立や国定公園内では採取禁止、千葉・柏市や埼玉・飯橋市などでは群生地を天然記念物に指定、保護するほど貴重な植物。他の山菜とは違う」と指摘する。

カタクリ保護の全国的組織、カタクリ研究同好会代表の鈴木由喜さん(右)は「東京・秋川市にも採れはいいという山菜ブームに乗っただけの状況はおかしい」と懸念。

また、東頸・松代町のまづた町農協のバック詰めを、息づくのスーパーの野菜売り場で

▲資料4. 朝日新聞新潟版(4月20日)のカタクリの記事

見た茨城県牛久市の主婦も、十日付本紙掲載に「鮎魚時代のブルメシ好きが自然食愛好家の要求なのか。谷あいに咲いているのを切るのほ惜しい。もっと自然を大切に」と投稿した。

こうした声に、まづた町農協の佐藤実生(左)は「山菜ブームは二十三年ごろ、東京の市場から『珍しいから送ってほしい』と

と書かれ、毎六百八十円を東京、新潟などの市場へ出荷している。よく見かける花なので、それほど買収は限られた。そして、約四百戸の農家で八十万円ほどの売り上げ。大きな収入源で、他の農協とも話し合っ、受益以降の出荷の是非を検討して」といっている。

松代町蓮平の群生地は、いまが花の真っ盛り。数千本が咲き乱れ、登下校の子供たちの目を惹きつけている。町内に住む会社員は「毎年この季節が待ち遠しいが、心なしか花畑がなくなり、数も減ってきた感じがする。ななっとなんか」と話している。

「カタクリの生活史」

詳細について知りたい方は下の本をみて下さい。

Newton
special issue

植物の世界 第1号

教育社 1988